

【愛知】伊勢湾台風が生んだ「おたがいさま運動」の盛んな病院—長江浩幸・南生協病院長に聞く ◆Vol.1

2019年8月20日（火）配信 m3.com地域版

伊勢湾台風（1959年）の被災地では、全国からの医療ボランティアが住民とともに被災者支援を行った。この経験から、2年後の1961年「この地域に自分たちの病院が欲しい」と住民が出資金を出し合い、医療ボランティアとともに住民の手で南生協病院が設立された歴史がある。308人で始まった組合員組織は2019年4月に9万人を突破。地域のくらしのささえあい・たすけあいの協同を医療生協がマネジメントすることで、総合病院を中心としたくらしのネットワークを構築し、まちづくりにつながっていることから、厚生労働省の「地域包括ケアシステム」のモデル事例にも取り上げられている。南生協病院は検診をはじめ、病児保育、旅行代理店やフィットネスクラブの併設、マルシェの開催など、組合員の声を活かしたさまざまな事業や取り組みを実施。2015年には最寄り駅と病院を結ぶ多世代共生施設「南生協よってって横丁」もスタートした。グループホームやサービス付き高齢者向け住宅を中心に、飲食店や自習室も併設しており、地域住民の交流施設として利用されている。南生協病院の歴史や、南生協よってって横丁を作った経緯などを院長を務める長江氏に聞いた。（2019年6月4日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）



南生協病院・長江浩幸院長

—長江院長のこれまでのご経歴や医療に対する思いをお聞かせください。

1984年名古屋大学医学部を卒業し、同年より初期研修を南生協病院で開始しました。医師になった当初から、「人を支える医療」に興味を持っていました。外科の先生のように「私を治してくれた先生」といって尊敬されるのもよいですが、「いつも診てくれる先生」といって信頼される医者も魅力的だと思ったのです。

大学を卒業して5年後の1989年に、米国でC型肝炎ウイルスが発見されました。当時、ウイルス肝炎には今のようない治療法もなく、発症すると何十年も経て肝硬変・肝がんとなり亡くなってゆく難治性の疾患でした。患者さんはこの長い間、不安の中で生きていくしかない病気だったのです。

そんな肝臓病患者の支えになればと、内科医として肝臓病を担当することになりました。当院にはウイルス肝炎の患者会があり、その顧問として患者さんの悩みや不安、希望を聞きました。患者自身が自分の病気を学び自己決定ができるように、「肝臓教室」や院外の「医療相談会」などを開きました。診察室の外で患者さんの不安や期待の声を聴く貴重な機会でした。この時期に先輩医師から教えられた「患者自身に治る力がある」「医療はよい人生を送るためのサポート」であるということは今も信条として、職員にも伝えていきます。「先生に会えてよかった」「診てもらえてよかった」と言ってもらえることが、日々の原動力ですね。

—設立に至った経緯など、貴院のこれまでの歴史や役割について教えてください。

1959年伊勢湾台風がこの地を襲い、大きな被害をもたらしました。その時、住民と医療者の共同で被災者支援を行いました。1961年「自分たちの医療機関が欲しい」と地域住民が仲間をつくり出資金を出し合い、南医療生協が設立。被災地支援に参加した医療ボランティアが参加して当院の開設へと至りました。組合員数は308人からのスター

トでした。現在、組合員数は9万人になり南生協病院のほか、この地域に63の医療・介護・住宅などの施設を運営しています。当院は組合員が中心となり立ち上がった病院ではありますが、もちろん非組合員の方も来院いただけます。組合員になると、生協の各支部・地域で開催されるイベントに参加できるなどさまざまな特典があります。生協病院では、人間ドックやがん検診、出産費用、インフルエンザのワクチン接種や文書料金などの保険外料金が組合員料金で利用できます。

1961年設立当時の組合員の多くは、学生やこれからの社会を担う若者たちがほとんどであり、地域の労働人口も多い時代で、労災や公害問題、障がい児医療、夫の立ち会い分娩など、社会の抱える問題をはじめ、新しい取り組みにも積極的に挑んできました。「住民の高齢化」による医療需要の変化に合わせて、在宅医療や緩和ケアを導入してきました。97年には患者やその家族とともに院内で「緩和ケア研究会」を立ち上げ、その盛り上がりを受けて、02年に緩和ケア病棟を立ち上げました。開設式では当院の緩和ケア病棟の開設を心待ちしていた患者・家族とスタッフ・ボランティアと一緒にテープカットをしました。この利用者と共同の活動は現在も「病棟ボランティア」として引き継がれています。

当院の周辺には藤田医科大学病院、長寿医療研究センター、大同病院、西知多総合病院の4つの大病院があります。そんな中で、病床数313の中規模病院である当院の位置付けは、高度急性期ではなく、「生活に近い場面を守り支える二次救急病院」です。組合員をはじめ、地域住民が困った時に相談に来られる場所であり、必要な医療が受けられるように「窓口」として機能することが、当院の大きな役目だと思っています。今は「南医療生協」だけですべての医療ニーズにこたえられる時代ではありません。地域にある大・小ささまざまな医療機関はもちろん、医療機関だけでなく自治体やNPOなどの各種団体、いわゆる「地域」と連携していく必要があります。地域に暮らす者同士、互いに力を合わせて、その時々の人々の暮らしに寄り添う医療を提供していきたいと考えています。

——組合員の「声」を取り入れた事業や取り組みに積極的ですが、その中でも特色あるものについて、具体的に教えてください。

真っ先にご紹介したいのが、9万人の組合員のネットワークを生かし、住民同士が互いに支え合う「おたがいさま運動」です。この運動では【「困った」が言いあえる、おたがいさまのまちづくり】をすすめていくために、「おたがいさまシート」というツールを活用しています。何か困り事があったり、サポートが欲しい時に、「どこの誰が、どのような事に困っていて、どんな手助けを希望しているのか」を生協本部の「地域ささえあいセンター」に提出（FAXでも可）します。組合員やスタッフの有志で構成された「おたがいさまサポーター」が、困りごとを解決してくれるのです。

これまでの利用実績はおよそ1500件、シートは病院3割、介護施設・診療所が3割、地域からも3割だされています。50%以上が75歳以上の後期高齢者の悩み事ですが、子育て中や外国人の困り事もあります。この90%を地域や職場のつながりで対応し解決できています。些細なことであっても、当人は本当に困っています。「話し相手がほしい」「ゴミ捨ての日を忘れないように声をかけてほしい」「病院や買い物に付き添ってほしい」「一人暮らしの家族の安否確認をしてほしい」など、一人ひとりのさまざまな「困った」に「おたがいさまシート」を介して寄り添うこのしくみは、病院機能評価でも高く評価されており、当院の特徴的な医療の質と考えています。



南生協病院は「生活に近い場面を守り支える二次救急病院」と語る長江氏

◆長江 浩幸（ながえ・ひろゆき）氏

1984年名古屋大学医学部卒業。翌1985年の初期研修以来、長きにわたり、南生協病院に勤務。内科、緩和ケア科を経て、院長に就任。

【取材・文・撮影＝大熊 智子】